

友よ 第十二回

赤神 諒



第十二章 円陣

——天正十四年（一五八六年）十二月、豊後国・戸次川



仙石秀久の命により鏡城跡の陣を發した四国勢は、下流のへ園田の渡しから戸次川の東岸へ渡河を終えた。

今、南の山稜に建つ鶴賀城へ向かって、川に近い西の山崎の地に土佐勢三千が、東の迫ノ口に讃岐勢三千と大友勢二千がそれぞれ布陣している。

右翼の長宗我部軍は川沿いに、上流から一千ずつの三陣。

前から第一陣を桑名、第二陣を信親、第三陣を元親が指揮する三段構えの編成である。他方、左翼は山際に展開し、第一陣が十河存保そこうながやすの一千、第二陣が仙石秀久の二千、第三陣が大友義統よしむねの二千であった。山と川に挟まれた地で、いずれも縦に長い陣形を強いられている。

信親は不気味な静けさが覆う山から、川へ視線を移した。

彦十郎の読み通りに島津軍が仕掛けてくるなら、最初に攻め込まれるのは川沿いの右翼、自陣だ。

山崎の長宗我部軍本陣には、隣り合って上座にある元親と信親の前に、谷忠兵衛、福留隼人、桑名太郎左衛門、石谷頼辰いしがいよりとぎ、本山親茂もとやまちかしげ、吉良親実よしかかざね・親正兄弟ちかまさなど、主だった将たちが向かい合って並んでいた。命令で渡河したものの、敵の動きがわからない。間者は放ってあるが、作戦を立てようにも、四国勢は敵を知らなすぎた。

「総大将が宣のたまうごとく、敵が本当に尻尾を巻いて撤退してくれれば御の字なのですがな」

座をほぐすように桑名が早口で口火を切ると、ふだんは無口な元親が珍しく応じた。

「かつての長宗我部と同じだ。島津は決して退ひかぬ」

軍議での仙石は取り付く島がなかった。話も噛み合わず、対話が成り立たなかった。何かに取り憑つかれたように、誰とも目を合わせず、命令だけを伝え、出陣を命じた。

出入りを許された航八こうはちが足早に現れ、片足を突いた。まだ幾分幼さを含む声で告げる。

「伊集院久宣いじゅういんひさのぶ率いる軍勢、約五千が竹中に入りました」  
帷幄にどよめきが起こった。

信親も内心唸った。陣卓子に広げられた絵地図によれば、竹中の地は戸次川の対岸にある。今まで四国勢がいた鏡城跡の近くまで、敵は出てきたわけだ。

「竹中の方角から来るなら、右翼のわれらは戸次川からまともに攻撃を受けまするぞ」

第一陣の桑名がしかつめらしい表情をしている。

「航八、他に敵の動きは掴つかめなんだか？」

信親が家久なら、出し惜しみなどせず、この戦に全軍を投入する。残りの一万三千余はどこだ。

「西岸には、他に敵の気配はございませんでした」

家久の本軍はまだ坂原山さかはらやまから動いていないのか。彦十郎が小さくかぶりを振った。

「敵は必ず全軍で来る。次は、東岸の山中を探れ」

「はっ」と畏かしこまった小柄な姿は、すぐに消えた。

すでに、いゝをやって探らせているが、戻りが遅いのが気懸かりだった。想い女を戦に使うのは気が引けるが、これが、いと共にやる最後の戦だと決めていた。

## 友よ 第12回

「父上。第一陣の一千では、五千の敵を防げませぬ。わが第二陣も共に迎え撃ちましょう」

信親の言葉に諸将が頷くと、忠兵衛の隣で彦十郎の低音がした。

「島津は〈釣り野伏〉なる戦法を得意としておるとか」

負けたと見せて敗走し、敵が追ってきたところを左右から伏兵で叩くという単純な罠だが、引かかる将が多いという。

「されば、かたがた。敵が退き始めても、指図あるまで決して追われませぬよう」

今では父の忠兵衛に代わり、彦十郎が直接具申するほうが多い。この戦を最後に、信親中心の政にするという元親の意向でもあった。

絵地図を囲みながら、戦の段取りや陣形を確かめてゆく。

想定しうる敵の攻撃、対する友軍の動きなどを述べ合う。土佐諸将はいずれも、四国統一戦を戦い抜いてきた歴戦の強者揃いだ。息は完全に合っていた。

「状況を見て、第三陣も参戦くださりませ。懸念は残りの島津勢でござる。戦場の様子には、常に心配りして備えられたし」

信親の言葉に、元親がゆっくりと首を縦に振った。

「大軍の強敵に対し、味方の総大将は不甲斐ない。頼れるのは、十河勢のみであろう」

咳払いをしてから、元親は小声でさらに付け足した。

「畢竟、この戦は勝ち目に乏しい。そも秀吉公は〈合戦無用〉と仰せ

## 友よ 第12回

である。されば土佐勢は頃合いを見て、戦場を離脱する。異郷の地で決して命を散らすな。必ず、生き延びよ」

諸将は元親と信親に向かい、一斉に畏まった。

土佐勢三千は一丸となって敵に当たるが、あまりに敵の数が多すぎる。いかに被害を少なくとどめて撤退するかが、この戦の勘所だ。

信親が暇乞いヒマガヒをして彦十郎と共に去ろうとすると、元親が声を掛けてきた。

「これが余の最後の仕事じゃ。後はすべて、お前に任せる」

元親の髪に交じる白いものに気付いた。当主として三十年近く、乱世のただ中を駆け抜けてきた父だ。気の休まる暇もなかったろう。

「お任せくださりませ。土佐へ戻れば、父上は良き川の辺ほとりにでも住まわれ、ゆるりと過ごされませ」

「川か。戦ばかりで、きちんと見ておらなんだな。川とは、それほど良きものか」

「無論でござる。川嫌いだった彦十郎さえ、今では大の川好きでござりまするぞ」

「最初から別に嫌いではありませんせぬが、川好きの気持ちが多さはわかったやも知れませぬ」

傍らの彦十郎が苦笑いすると、忠兵衛が口を挟んできた。

「若殿、御館様おやかたのご隠居を機に、身どもも家督せがれを倅せがれに譲り、神官に戻れぬものかと思っております。お許しくださいませ」

「俺の一存では決められまい。谷家の相論そうろんだからな」

谷父子が苦笑いしながら、見つめ合っている。

「この話し合いの決着は、今日の撤退戦より難しいやも知れんかう」  
元親がおどけると、皆が笑った。

「父上、土佐へ戻ったら、弟たちも連れて、皆で四万十しまんとへ参りましよう。幻の赤目釣りに猿猴えんこう探し、やりたいことが山ほどございますゆえ」  
「遊んでばかりおって、誰が土佐の政をやるんじゃ？」

「戦のない太平の世でござる。皆で、楽しみながらやりましよう」  
元親がはにかむような笑みを浮かべたとき、滝を思い出した。

老後を共に過ごすべき最愛の妻がいないのはさぞ寂しかろう。代わりには、孫たちはもちろん、信親の兄弟姉妹や一族郎党を連れてゆく。皆、笑顔で四万十を訪れ、水遊びをし、鰻でも食べばいいのだ。宴に猿猴も招けば、もっと楽しくなるに違いない。



二

対岸に敵影は見えねども、川ごしに近づいてくる異様な殺気は、もう隠しようがなかった。

馬上の信親は、七条兼仲しちじょうかねなか自慢の大雑刀の赤柄を強く握り締める。  
弓と鉄砲で先制した後、信親率いる騎馬隊が突撃し、足軽隊が続く。  
その後は戦場の様子を見ながら、頃合いを見て離脱する。

信親の右手で、桑名の早口が聞こえた。

## 友よ 第12回

「こたびは引き付けるな。敵の姿が見え次第、すぐに放て」

桑名が腕によりをかけて鍛え上げた弓兵隊は三百。腕に覚えのある連中ばかりだ。鉄砲隊二百は予め二隊に分けて細かく指図を与えてあるらしく、左手にいる彦十郎は涼しい顔をしていた。自らの鉄砲の師である沖長門まで引きずり出して共に練兵にあたり、命中精度をさらに高めたと聞いている。

五千の伊集院勢は、長宗我部の第一、二陣混成部隊計二千の倍を超える数だが、進軍中は遠距離攻撃ができない。二百間（約三六三メートル）ほどの川幅を渡河するには、相応の時を要する。敵はできるだけ川幅の狭い浅瀬を選んで通らねばならず、一斉に渡れもしない。数に勝る敵に接近されるまで、飛び道具であたう限りの打撃を与えておく作戦だった。

馬蹄の音と鎧武者たちの立てる金属音が聞こえてくる。

戸次川の対岸に、山麓の林を抜けた敵兵が次々と姿を現し始めた。

「放て！」

桑名の声を囁らした叫びは、すでに弦音にかき消されている。

遠矢を受けた敵が止まり、あるいは倒れるが、怯みは見えない。

鯨波が上がり、敵が水飛沫を上げながら渡河してきた。

「撃て」

彦十郎の低音と共に、ドオンと一斉射撃の轟音が川べりに響いた。

まずは百発だ。敵が水中に消えてゆく。

## 友よ 第12回

「放て！」

桑名が自らも素早く連射しながら、配下の弓兵を励ましている。弾薬の早込めで自らは二発目を構えながら、彦十郎が前後で入れ替わった百人の射手に命ずる。

「次。撃て」

たちまち轟音がし、川の中に敵が倒れてゆく。

戸次川の雄々しく青き流れが弓と鉄砲の驚くべき速射で、たちまち赤く染まり始めた。

入れ替わり立ち替わりの遠距離攻撃に、さしもの敵も怯みを見せた。が、数に任せてしゃにおに押し出してくる。

ついに此岸へ辿りつき、上がってくる敵兵が現れた。

なお数回、銃砲を轟かせた後、彦十郎が声を投げてきた。

「若、次の一斉射の後、頼みまするぞ」

いよいよ出番だ。

「承知！ 参るぞ、皆の衆！」

銃砲の轟音を合図に、信親は大薙刀を掲げながら陣を飛び出した。すぐに信親衆が続く。

川べりで、岸へ上がろうとする敵兵を突き落とす。

悲鳴もあげられずに川へ落ちてゆく足軽が、後ろにいた味方の足軽ごと倒れ、戸次川の中で派手な水飛沫を上げた。

たちまち乱戦となった。桑名と彦十郎の弓鉄砲隊が前線から素早



## 友よ 第12回

く引き、入れ替わって残りの騎馬と一両具足で押し出す。信親は自隊を指揮しながら、右へ左へ暴れ回った。

が、敵の数は多い。次第に押し込まれてきた。

少しづつ後退しながら応戦する。そろそろのはずだ。

右手遠くで、銃声が聞こえた。

手筈通り、桑名と彦十郎が下流側へ回り込み、遠距離から渡河中の敵に攻撃を加え始めた。下流側からの上陸を許せば、三方を包囲される恐れがあった。

それでも敵は猛進してくる。九州最強と伝わる島津兵は、噂に違わ<sup>た</sup>ず勇猛だった。

敵の槍が信親の脇腹を掠<sup>かす</sup>める。すかさず薙刀で首筋を狙った。血飛沫が上がる。一人ずつ確実に倒してゆくしかない。

のっぽの十市<sup>とおち</sup>が苦戦している。馬を寄せて、救い出した。

「若殿、押されておりまする！」

ちびの松崎が金切り声を上げた。槍袞<sup>やりぶすま</sup>に囲まれたとき、突然、包囲陣の一角が崩れた。

「荒切りの福留を知らんか！ 長宗我部の御曹司に手を出せば、首が飛ぶぞ！」

銅鑼<sup>どらごえ</sup>声で喚<sup>おめ</sup>きながら大太刀を振るい、次々と敵兵を斬り倒してゆく。

第三陣も加わり、敵を川へどんどん押し戻してゆく。

## 友よ 第12回

味方の弓鉄砲の音も止まない。

信親が雄叫びをあげながら敵中へ斬り込むと、敵が浮き足立った。さらに押し出すと、ついに退却を始めた。

「追うな、隼人。釣り野伏だ」

暴れ狂う猛将の背に声を掛けると、隼人は馬を止め、勢いに乗る配下の兵を太い腕で制した。

「弓、鉄砲隊、前へ！」

信親が言い終わる前に、桑名と彦十郎の五百の弓鉄砲隊がほぼ揃い、数段に構えていた。

敵の背後を一斉射が襲う。

伊集院勢が潰走かいそうを始めた時、傍らでるいるいの聲がした。

「若さま、この街道の先に伏兵あり。新納忠元の軍勢三千余が山中に潜んでおります」

新納武蔵守忠元といえおにむかしばへ鬼武蔵いみまうの異名をとる島津の猛将だ。長宗我部軍で言えば、ちょうど福留隼人のごとき豪傑らしい。その猛将が率いる新納勢は、最強の家久軍の中でも精強で鳴るという。

「大儀であった、るい。戻りが遅いゆえ、案じたぞ」

「お赦しを。少し疲れが出たのかも知れませんか」

「戦はまだ序の口だが、この辺りで今日の戦は手仕舞いにする。そなたはしばし休んでいるがよい」

気分が優れないのか、るいが手で口を軽く押さえている。最近たま

に見る仕草が気になっていた。

「急ぎ十市は父上に、松崎は総大将の陣へ行き、この先に島津の伏兵ありとお伝えせよ」

二蔵が畏まって去ると、鉄砲隊の指揮を終えた彦十郎が来た。

「たとえ小さくとも、勝ちも勝ち。われらは今、兵を引くのが最善でござる。釣り野伏を逆手にとって、勝ち逃げしましよぞ」

見ると、桑名は弓兵隊を下げ、すでに撤退の準備に入っている。

「この先の街道で、新納が待ち構えているぞうだ。俺が総大将に直談判して参る。何とか説得するゆえ、ここをしばし頼めるか。敵が釣り野伏を狙うなら、押し出してはくるまい」

いかに大軍であろうと、山と川の間きょうあいに続く狭隘な街道を川沿いに攻め下っても、数の利を生かせず、出口で待ち受ける四国勢の餌食となる。ゆえに長宗我部は、この地に布陣したのだ。戦上手の家久がそれをわからぬはずもない。

仙石の本陣へ向かうべく信親が馬首を返そうとした時、にわかには辺りがざわついた。讃岐勢の第二陣が動き始めている。真っ先に馬を駆る焦茶こげちやの頬当ほおあての将は、総大将仙石秀久だった。

「何と！ 総大将、お待ちください！ 釣り野伏でござる！」

信親が叫んでも、仙石は脇目も振らず、まっしぐらに駆けてゆく。その後ろを、羽床資吉はゆかすけよしが慌てた顔つきで追っている。

あれよあれよという間に、仙石勢二千は街道へ消えていった。さら

## 友よ 第12回

に、大友勢二千が続く。

他方、第一陣の十河勢は整然と並び、微動だにしない。存保は恐らく仙石を止めただろう。

「釣り野伏が危ないと何度も釘を刺したが、俺たちの目論み通りにはいかぬようだ。いかにすれば、小さな負けで止めうるか」

馬上の彦十郎は手に持つ鉄砲をいじりながら、ぼそりと応じた。

「いかに思案しても、敗北は必至でござる。されば、長宗我部は撤兵すべし。讃岐勢は見捨てられませ」

信親は友を凝視してから、かぶりを振った。

「それはできぬ。この二ヶ月余り、われらは同じ陣にあった友だ」

「秀吉公は合戦無用と、三度も文を寄越されたはず」

「長宗我部の誇りもある。総大将の命もなく、勝手に撤退はできぬ」

彦十郎はしばし考え込んでから、小さく頷いた。

「仙石秀久は悪運が強く、逃げ足にかけては天下一。生き残ってさんげん讒言をされてはかないませぬからな。この地形では相当難しい撤退戦になりましょうが、やむを得ますまい」

左手から馬の嘶なげきがし、兵が規律正しく動き出した。十河勢だ。

「存保殿もわれらと同じ思案か」

「御意。秀吉公の任じた総大将が討たれれば、責めを負わされかねぬと思し召されたかと」

紫威むらさきの将が大身槍を掲げ、信親に挨拶を送ってきた。

## 友よ 第12回

兼仲の大薙刀を天へ突き出して答礼すると、存保が軽い笑みを浮かべた。兵たちはまだでも、将が友となったのだ。共に戦う中で、きっと皆が友になれるはずだ。

彦十郎は馬上で絵地図を開き、川べりの一点を指差した。

「われらは脇津留<sup>わきつる</sup>まで出て、讃岐勢の背後を守るほかありませんまい」「良さそうな小川もある」

残りの敵は、まだ山中のどこかに潜んでいるはずだ。

突出した仙石勢が釣り野伏の罠に掛かり、さらに背後の退路を絶たれたなら、四方を囲まれて逃げ場を失う。それを避けるために十河勢が殿<sup>しんがり</sup>を務めるべく最後に続いたのだ。だが一千では、到底太刀打ちできぬ。土佐勢が助けねばなるまい。

「川沿いの四国勢は縦に長い陣形となり申す。敵の別働隊にわれらの背後を襲われてはかないませぬゆえ、第三陣はこの地にとどまるべきかと」

たった一千の兵力だが、元親と忠兵衛なら敵の伏兵攻撃にも対応できよう。隼人もいた。

傍らで黙って聞いていたるいを顧みる。

「るい、第三陣へ出向き、彦十郎の策を父上にお伝えせよ」

「かしこまりました」

急ぎ立ち去ろうとする小柄な背に、「待て」と声を掛けた。

信親は馬を降りると、るいの肩に手を置き、小顔を覗き込んだ。

## 友よ 第12回

「腹のなかに、子がいるのではないか？」

漣が身籠った時も、つわりのせいで時どき体に不具合があった。近ごろのるいの様子はその時によく似ていた。昨日、馬から飛び降りなかつたのも、身籠みこもっていたからだ。

るいは驚き顔で信親を見つめたが、やがて「はい」と頷うなづいた。

「その体では、戦えまい」

これまで長宗我部はるいいに辛い思いばかりさせてきた。これから  
はもう、させぬ。

「俺は皆と四万十を訪れる約束をした。この戦は負けるが、死ぬつもりはない。とは申せ、戦は水物だ」

信親は辺りに構わず、るいをそっと抱き寄せると、耳元で囁ささやいた。

「そなたは父上にお伝えした後、すぐに戸次川を離れよ。先に土佐へ  
帰り、四万十で待っていてくれぬか。実は実喰ししくい屋やに頼んで、空き屋敷  
を一軒きれいにさせてある。今日この日で、忍びの役目はすべて終わ  
りだ。必ず生きて、俺の子を産んでほしい」

「若さま……」

るいはあの笑みを浮かべようとしたが、涙に邪魔邪魔されている。

「俺に万一のことあらば、長宗我部の家なぞ背負せわせず、気楽な人生  
を歩ませてやってくれ」

「……かしこまりました」

後ろ髪を引かれるような足取りで、小柄な姿が去ってゆく。るいは

## 友よ 第12回

川沿いの隘路へ入る前に振り返った。濃鼠の小兵はゆっくり一礼すると、森の陰に消えた。

水戸  
巻三

仙石秀久は夢中で馬を駆った。川沿いの街道を抜けてゆく。

「敵は弱いぞ！ 鶴賀城へ入る前に追撃じゃ！」

戦わずして逃げ帰れば、薩摩で臆病者よと誇られよう。だから島津は、形ばかり戦った証を残してから、引いたのだ。これは釣り野伏ではない。仙石は確信していた。

長宗我部はほとんど無傷で、島津を撤退へ追い込んだ。仙石も戦場で逃げた経験があるから、わかる。どれだけ強い人間でも、逃げ始めると、悲しいほど弱くなるものだ。追撃戦ほど、手柄を上げやすい戦いも少ない。

——島津家久はとうに坂原山から逃げ出しておるわ。せめて伊集院久宣を討てば、手柄になる。

このまま島津の将たちが逃げおおせてしまえば、長宗我部の手柄だけで終わる。戦功を独り占めにされてなるものか。

あの負け方は尋常でなかった。実際に敵は少なからぬ死傷者を出していた。追撃して兜首の一つでも二つでも取れば、それなりに恰好は付く。資吉が首級を上げてくれるだけでよい。だから無理やり同行させた。

## 友よ 第12回

逃げてゆく敵の最後尾が見えてくると、仙石は馬速を緩めた。

「追い込め！ 突撃せい！」

仙石勢が鬨の声を上げて島津軍の背後へ殺到してゆく。

島津兵は抗おうともせず、ただひたすら逃げた。

見よ。わしの見込んだ通りだ。間違いない、勝てる。

「殿、深追いは禁物にございまするぞ！ 釣り野伏でござる！」

意外にも、資吉が隣で馬を止めて騒いだ。

「阿呆めが。長宗我部にあれだけ負けて、釣り野伏なんぞできぬわ。

仮にやりおっても、襲われる前に兵を返せばよいのよ。早うお前も追

撃せんか」

仙石が叱咤すると、資吉は金砕棒かなさいぼうを手に、ゆっくり馬を走らせ始め

た。急がぬのはあてつけか。

「追え、追わんか！ 皆の者、手柄をあげい！」

逃げ続ける敵に追いつがって、仙石勢はへ竹中の渡しへまで出た。

敵は戸次川を夢中で渡って逃げている。が、流れに足を取られる敵

兵もいる。前の者たちが邪魔になって進めぬ兵もいた。何と無様な姿

か。途中で立ち往生する敵を背後から襲うのだ。かくも楽な戦は、な

い。

「全軍、突撃じゃ！ 川の中で襲え！」

仙石は水の中へ勢いよく馬を乗り入れた。調子に乗った時の仙石

勢はめっぼう強い。



家久はもう逃げたのだ。首は取れまいが、それでも仙石が西国の名将に勝利したことに変わりはない。

仙石が堪え切れずに含み笑いを漏らした時、左手で大地が揺れるような轟音が響いた。

覚えぬ槍を取り落とし、耳を塞ぐ。

慌てて東の向こう岸を見やると、鉄砲足軽が山からぞろぞろと現れていた。

——ま、まさか本当に、釣り野伏じゃと申すのか……。

仙石は全身が金縛りに遭ったように動けなくなった。

側面へ一斉射撃を受けた渡河中の仙石勢は、たちまち壊乱した。

陣頭で指揮をとっているのは、髭面の将だ。旗を見ると、島津のへ丸十字の「十」の字が右に撥ねている。へ丸に鍵十字だ。もしや鬼

武蔵こと、新納忠元ではないのか……。

仙石は必死で辺りを見回した。退路はどこだ。逃げ場を探せ。

川を戻れば、鬼武蔵が待ち受けている。

深追いした仙石自身は、幸い戸次川を渡っている最中だ。このまま渡り切れれば、西岸沿いに下流へ逃げられるはずだ。

仙石は足軽が拾って差し出してくれた槍を受け取った。が、すぐに川へ放り捨てた。

とにかく今は、逃げることに専念すべきだ。

また、左手から凄まじい銃声がした。仙石はぶるっと震えあがった。

## 友よ 第12回

三年前、引田<sup>ひけた</sup>で敗れた時は、仙石が引き際を間違えたために、危うく長宗我部軍に殺されるところだった。あの時は腰を抜かして、糞尿まで漏らし、実に惨めな思いをした。今度こそ命を落とすやも知れぬ。あのような恐ろしい思いは二度としたくなかった。逃げる時は、なりふり構わず一散に逃げたほうがよいと学んだ。誰が何と言おうと、命あつての物種だ。

今回の戦も、もともと敵のほうが、はるかに数が多かったのだ。敗戦の責めを長宗我部と十河に押し付ける手立ては、後でじっくり考えればいい。

——逃げ時じゃ！ わしは逃げるぞ！

内心で叫ぶが、前には味方の雑兵がいる。川を渡り終えた先鋒の羽床資吉の巨体も見えた。

——どいつもこいつも、ええい、邪魔じゃ。

仙石は両手で手綱を握り締めると、下流側に馬首を変えた。

川の深みにはまった馬が溺れかける。

舌打ちをしながら、「どけい！」と前に行く家人を叱った時、前方で甲高い剣戟<sup>けんげき</sup>の音が始まった。

仙石は泣きそうになった。逃げていたはずの伊集院隊が引き返し、切り込んできたのだ。

浮足立った味方の将兵が次々と討たれてゆく。

何という強さだ。さつきとは、まるで人が変わったようだった。長

宗我部はこんな強敵をどうやって倒したのだ。

資吉が士卒を励まし、金砕棒を振り回して、必死で食い止めている。

——早う逃げんと、殺される……今のうちじゃ！

仙石は心中で叫ぶと、味方の雑兵を蹴散らしながら、やっとこさ対岸まで辿り着いた。

「殿、ここで踏みとどまりましたようぞ！ 伊集院勢を食い止めねば、後続の者たちが川の中で全滅いたしまする！」

わしの知ったことか。仙石は聞こえぬふりをした。

資吉に目も合わせず、「どかんか！」と味方の足軽たちの中へ馬を乗り入れてゆく。

「総大将、お待ちください！ 十河勢が囲まれまするぞ！」

背後で資吉の叫び声が聞こえても、必死で馬を駆った。

幸いこの辺りに敵はまだいない。このままずっと川沿いに下れば、逃げ切れるはずだ。

真っ先に逃げ出していた仙石勢の足軽が、慌ただしい蹄ひづりの音に驚き、仙石のために道を開けた。

振り返ると、讃岐勢が総崩れとなり、仙石の後を追って来ていた。ほっとした。これだけ後ろを逃げる味方がいれば壁ができて、仙石が討たれる心配は少ない。

仙石は敗勢の先頭に立った。いや、前を走る馬がいる。秀範ひでのりではないか。親に似て、こいつも逃げ足だけは速い。が、馬術は人並み以下

だ。あつという間に並ぶ。

「待ってください、父上。府内まで逃げればよいのでござるか？」

秀範が戦死すれば、秀吉の赦しを得やすかろうと思った。

「おうよ。待っておるぞ」

阿呆めが。誰が府内なんぞ守る？ 少しは自分の頭で考えよ。

仙石が向かう先は小倉こくらだ。豊前の北、小倉まで一気に逃げれば、必ず助かる。命さえあれば、また復活できる。

秀範の馬を勢いよく追い抜いた時、対岸を上流へ進軍してゆく長宗我部勢に気付いた。先頭は白銀しろがねに紅糸威の具足で、真紅の陣羽織を羽織っている。こっちを見ている気がした。

まずいところを見られた。が、あの若者なら、口裏合わせに乗ってくれまいか。

とにかく今は生きるのだ。きっと大丈夫だ。この調子なら、わしだけには逃げ切れる。

仙石は対岸から目を背け、目指す下流だけを見つめて、ただひたすらに馬を駆った。



四

少し前から銃声が前方で何度も轟とどろいていた。鯨波も聞こえる。讃岐勢が釣り野伏に掛かったに違いない。

川沿いの隘路を抜けると、信親は息を呑んだ。隣の彦十郎も馬を止

めている。

何が起こっているのか、すぐには掴めなかった。大乱戦だ。

下流めがけて、まっしぐらに対岸を駆けてゆく馬上の将が目に入った。焦茶の頬当を見るまでもなく、総大将の仙石とわかった。総崩れの仙石勢が続き、われ先にと戦場から逃げ出してゆく。

「引田の時も素早かったが、逃げ足だけは天下一品でござるな」

舌打ち混じりの彦十郎の毒舌には、明らかな嘲笑と瞋恚しんいが込められている。

「戦には向かぬ御仁であった。だが、総大将の軍勢が逃げても崩れぬとは、さすがに十河は長宗我部と四国の覇を競った名将だ」

対岸の竹中では、敗走していたはずの伊集院勢五千が反転し、逆に攻めかかっている。が、十河存保が踏みとどまって、何とか総崩れを防いでいた。金砕棒で暴れている巨漢は羽床資吉だ。

此岸、街道の前方から、十河勢の背後に向けて動き始めた軍勢がある。

へ丸に鍵十字の軍勢、新納忠元だ。

「鬼武蔵に背後を攻められたなら、十河勢はひとたまりもあるまい」  
突撃を指図しようと呼び出した時、横からにゅっと鉄砲の銃身が差し出された。

「待たれよ、若。今が、最後の引き際でござる。十河が足止めをしてくれる今のうちに兵を引けば、長宗我部は助かり申す」

## 友よ 第12回

信親は愕然として、彦十郎を見た。

すでに十河勢と一部の太友勢を除き、讃岐勢は潰走を始めていた。それでも戦場には、まだ家久の本隊さえ現れていない。今なら、長宗我部はほぼ無傷で撤退できる。

だが、十河は長宗我部によって長年苦しめられてきた。ようやく恩讐を乗り越え、両家の将が友としての一步を踏み出したばかりだった。その十河を犠牲にして、長宗我部が生き残るのか。

信親は手にある兼仲の大薙刀を、赤柄がみしりと音を立てるほど強く、握り締めた。

「さような真似が、俺にできると思うか？」

「すべての者を守れば致しませぬ。諦められませ、若」

「友を見捨てたとき、俺はもう、俺でなくなる」

信親は彦十郎と睨み合った。

「この戦はもう、いかに足掻いたとて、大負け。今、撤退せねば、後は生き延びられるか否か、綱渡りの連続にござる。まさかこんな所で死ぬおつもりか。若にはまだ土佐でやり残したことがござろう」

その通りだ。十河勢を対岸から無事に逃がしえたとしても、今度は逆に、長宗我部勢が全滅しかねない。

信親は頷いて馬首を返すと、長宗我部の将兵たちに告げた。

「羽柴の大軍の前に、島津はいずれ必ず敗れ去るであろう。乱世は終わり、待ちに待った太平の世がもうすぐ来るのだ。されど、今これか

## 友よ 第12回

らやる戦いでは、土佐へ生きて帰れるかわからぬ」

信親は深呼吸してから、皆に語りかけた。

「俺には、目の前で死なんとする友を見捨てる真似はできぬ。だが俺は、友を道連れにして死ぬこともできぬ」

乱世四国を共に駆け抜けてきた戦友たちの前で、信親は宣言した。

「されば、第一、第二陣混成部隊はこの戸次川で、ただ今をもって解散する。先に土佐へ帰る者は、ただちに引き返し、父上の第三陣に加われ」

どよめきの後、土佐将兵が皆、食い入るように信親を見つめている。

信親が語り終えても、誰一人動こうとはしなかった。

「若殿に従いて参りますぞ！」

氣勢を上げたのは吉良親正だ。伊予戦線で活躍していた従兄である。

「押し出してから、一気に引きましようぞ。まだやりようはござる」

続いたのは本山親茂だ。かつて元親と敵対したが、恩讐を超えて友となった歴戦の名将で、やはり信親の従兄にあたる。

諸将が口々に賛同すると、二蔵が音頭を取って、皆が一斉に雄叫びを上げた。

「皆、礼を言う。死力を尽くして友を救い出し、生きて土佐へ帰るぞ！」

戸次川河畔にひととき大きな鯨波が上がる。

## 友よ 第12回

信親は馬上で苦笑する友に問いかけた。

「策をくれぬか、彦十郎。いかにすれば十河勢を救い出し、多くの友を生きて帰せる？」

「とびきり難しい注文を。されば——」

彦十郎は馬上で鉄砲を弄もてあそびながら、続けた。

「街道の利を生かし、うまく誘い出してください。新納を叩いた後、一目散に逃げましょうぞ」

阿あ吽うんの呼吸でわかった。長宗我部には自慢の弓鉄砲隊がある。釣り野伏をやり返すわけだ。

信親は陣頭に立つと、大薙刀を青空へ向かって突き上げた。

「全軍、新納勢の側面を衝け！」

新納勢の猛攻さえ抑えれば、十河勢は対岸に退路を切り開けよう。

長宗我部は押し込んでから、一気に引く。家久の本隊が未着の今なら、まだ可能な戦法のはずだった。

信親は先陣を切った。疾風のように駆け、大薙刀を突き入れる。

次々と味方の兵が突入してゆく。

新納勢は猛然と反撃してきた。一人ひとりの兵が段違いに強い。が、信親衆とて、四国一の精兵だ。

若き雄叫びをあげる。信親は辺りに人無きが如く、大薙刀で暴れ回った。

敵中を突き進むうち、槍やり衾ぶすまに出くわした。敵の数が多い。川から引



## 友よ 第12回

き返してくる敵兵もいる。これで、作戦は成功だ。今のうちに、十河勢が撤退してくれるよう願った。

乱戦の中、信親はじりじりと後退してゆく。

新納勢は三千だ。長宗我部の二千よりも、数で勝る。

頃合いを見て、信親は「脇津留まで引け！」と短く命じた。

崩れぬよう吉良、本山と一緒にしんがり殿となって食い止める。一領具足たちが先に離脱してゆく。

信親は踏みとどまって、暴れた。

敵兵に囲まれる寸前に、馬首を返して遁走とんそうした。皆で一斉に引く。

関とじの声を上げながら、敵が追いつがってくる。

脇津留まで引いたとき、左右から同時に銃声と弦音がした。

「反転せよ！」

反撃開始だ。馬首を返し、追撃してきた敵勢に斬り込む。

左の山際、右の川べりから銃声と弦音が絶え間なく聞こえている。

「突撃！」

信親が真っ先に馬を入れ、新納勢を押し戻した。

三方からの一斉攻撃に、新納勢は怯み、ついにはなすすべもなく後退してゆく。

「若、頃合いでござる。逃げまするぞ」

傍らへ来た彦十郎が言い終わらぬうち、対岸の竹中の奥で地鳴りのような関の声が上がった。

## 友よ 第12回

「何が起こった？」

新納勢の追撃から戻ってきた吉良が答えた。

「対岸に家久の本隊が来たようでごさる。兵力は八千余とか」

さすがに神速の用兵だ。竹中で死闘を繰り広げていた十河勢が大軍の波に呑み込まれつつあった。これで、戦場に残った讃岐勢も壊滅だ。存保は武士の意地ゆえに撤退しなかったのか。

やがて対岸の敵は竹中の渡しを通過して、襲来するだろう。

十河と違い、長宗我部は、敵が対岸から渡って来るぶん、逃げるためのはは稼げる。

「全軍、撤退せよ！ 急げ！」

信親が叫ぶや、土佐勢はただちに整然と撤退を開始した。

山崎の地で退路を確保している元親隊と合流し、そのまま川を下ればいい。

長宗我部勢三千は、これまで負けておらず、ほとんど将兵を失っていなかった。信親衆が殿を務める。川沿いの隘路で敵を食い止めつつ、将兵があたかも一頭の龍のごとく整然と動けば、退却できよう。高崎たかさき山城やましやうまで辿り着けば、府内は守れずとも、籠城戦に入れるはずだ。徒歩の土佐将兵を先行させながら、信親が対岸を振り返った時、竹中でひとときわ高い歓声が上がった。

信親は唇を噛んだ。最後まで戦場に踏みとどまった十河存保が討ち取られたに違いない。

## 友よ 第12回

十河という壁が失われた今、いよいよ対岸から、伊集院隊五千に加え、家久の本隊八千が奔流の如く押し寄せてくるはずだ。それが到達する前に、下流へ逃れねばならぬ。

「皆の衆、山崎へ逃げ！ 敵が来る前に逃げよ！」

信親は一領具足たちを励ましながら、下流へ向かう。

足の速い敵騎馬隊が対岸を進み始める様子が見えた。下流側へ回り込んで退路を断ち、第三陣との合流を防ぐ肚か。時を置いて雲霞うんかの如き足軽隊が、戸次川を渡ってくるに違いなかった。

「このままでは、敵がわれらの退路へ回り込みますぞ。若は先に逃げられよ。後は私が指揮いたしまする」

彦十郎の進言に、信親は声を立てて笑った。

馬で疾駆すれば、元親の軍勢に合流できよう。だが、友を置き去りにして己ひとり逃げおおせるなど、考えもしなかった。

「俺は皆と一緒に土佐へ帰る。彦十郎、済まぬが付き合ってくれ」

たとえ敵が元親隊との間に入り、長宗我部勢を分断したとしても、今ならまだ、敵の数が知れている。信親衆が突撃すれば、突破できるはずだ。

一領具足たちが懸命に駆けていた。前方に行く者たちは、行く手、川沿いの隘路の向こうにいる第三陣に合流できていよう。すでに半分以上は助かったはずだ。

信親は駆け足に合わせて馬を走らせながら、背後を振り返った。

川沿いの街道に、敵の姿はまだ見えない。

「彦十郎。なぜ、敵が追って来ぬ？」

対岸では断続的に騎馬の一団が見え始めたが、幸い此岸では背後からの追撃がまだない。

「はて。鬼武蔵が機を逃すとも思えませぬが、われらにとっては僥倖こゝろ。今のうちでござる」

敵騎馬隊の数が対岸に増えてきた。足輕はまだだ。

なかつるがわら中津留河原の浅瀬が近づいてくると、次々と水飛沫があがった。ついに対岸の伊集院隊が渡河を始めたのだ。

信親は馬速を緩めながら、背後を振り返った。

この戦場をまだ離脱していないのは七百人ばかりか。一領具足たちを先に行かせた将たちも、まだとどまっている。

先頭の敵騎馬隊が鬨の声を上げながら、行く手の隘路へ次々と乱入してきた。これで下流側に敵が入り、元親隊と分断された。敵は元親の首を取りに行くためか、こちらへ戻らず、そのまま下流側へ攻め下っている。

渡河せずに対岸を進む敵勢のほうが数は多い。〈園田の渡し〉から山崎の下流へ回り込み、元親隊の退路を断つ肚か。

まだ現れていないが、後方の上流には新納勢がいる。川を隔てた対岸では、伊集院隊と家久の本隊が進軍中で、これから足輕隊が続々と現れるはずだ。

## 友よ 第12回

「彦十郎、このまま敵中を突破するか」

「いや、馬を捨てて、山に入るべきかと」

なるほど、後ろへ南の上流へも、行く手へ北の下流へも、左手へ西の戸次川へも敵だらけだ。だが、三方を包囲されても、まだ東の山がある。一領具足と共に山を逃げるなら、馬の速さは無用だ。山中へ皆で逃げ込めばよい。

信親が東の山際を見やった時、薩摩兵の足軽の恰好をした小柄な男に気付いた。陣笠を取ると、航八と知れた。馬を止める。

「よくぞ戻った、航八！ 案じておったぞ！ 街道の新納勢の動きはわかるか？」

鬼武蔵の軍勢三千余が襲来すれば、この平地は修羅場と化す。それまでに何としても離脱するのだ。

駆け寄ってきた航八がまだ息を切らせながら、途切れとぎれに答える。

「大友方の戸次勢べつきが止めておりまする」

信親は息を呑んだ。当主の義統は仙石に続いて敗走したようだが、若き戸次統常むねつねの一手、百人ばかりは撤退せず、新納勢の側面に戸次川から斬り込み、ここを死に場所と奮闘しているという。

「さすがは、戸次の家を継ぎし将よ」

統常は援軍で来豊した信親と長宗我部に対し、強い恩義を感じていた。少しでも多くの土佐兵を逃がそうと踏みとどまったに違いな

## 友よ 第12回

い。見えぬところで、友は、戦っている。

鶴賀城内のキリシタンたちも寡兵ながら呼応して出撃し、新納勢の側面を山側から衝いたが、猛烈な鉄砲射撃で撃退されたい。ただ見ぬ友も、戦ってくれていた。

「家久本隊の動きは？」

「半分ほどが竹中からこちらへ渡り、新納勢に続いて参りましょう」  
此岸の敵兵力は七千、対岸には九千か。追いつかれれば、ひとたまりもなかった。

「われらはこれより、敵を避けて山に入る」

彦十郎の言葉に、航八はかぶりを振った。

「山側は無理かど。ほどなく本庄主税助ほんじょうちからのすけの軍勢、数千が迫ノ口から押し出して参りまする」

「敵はまだ他にもいるのか……」

信親は愕然とした。予期せぬ兵力だ。彦十郎も首を傾げている。

別働隊は坂原山から鶴賀城を迂回しつつ難路を進軍中だという。

もはや退路はただ一つ、下流側にいる敵中を突破するしかない。

幸い、今はまださして敵の数が多くはなかった。

精強な信親隊が一丸となって突撃すれば、突破は可能だ。

「残っておる兵を集めましょう」

信親が馬を止めると、自然に将兵たちも集まっていたが、彦十郎が声を掛けると、わざわざ遠くから戻ってくる兵たちまでいた。

## 友よ 第12回

と、馬が嘶いななき、戸次川から岸へ上がってくる数騎がある。馬上の巨体で、羽床資吉とわかった。

「若、ご無事でございましたか！」

「なぜ、渡ってきたのだ？」

「向こう岸から、若の具足が見えましたゆえ。拙者もなかなか運がようござる」

資吉らしい。そのまま逃げれば助かるうものを、わざわざ川を渡って合流してくるとは。

「十河殿は？」

「見事なお最期にございました」

資吉たちを逃がして踏みとどまり、竹中で壮絶な戦死を遂げたらしい。友の死を無駄にはできぬ。叶うなら生き延びて、十河家の存続のために力を尽くしたいと思った。

彦十郎の集めた土佐将兵が、信親の周りを取り囲んでいる。

「皆の衆、これよりわれらは一丸となって、敵勢に突撃する。敵中を突破した後は、ひたすら川沿いに下れ。前に敵がおれば、山へ逃げ込め。決して命を捨つるな！ 高崎山城で会おうぞ！」

将兵が歓声を上げた時、下流側の敵勢の中から飛び出してくる二騎があった。敵中を逆流して突破できる武勇を持つ者など、数えるほどしかない――。



遠くに漆黒の甲冑を認めた瞬間、信親は背筋に悪寒を覚えた。福留  
隼人だ。

信親が戻らぬため、もしや元親は、逆に山崎から乱軍の中を、上流  
へ逆行しているのではないか。戸次川を渡ってくる敵が信親のいる  
中津留河原へは戻らず、下流のほうへ突き進んでばかりなのは、撤退  
しようと思えぬ第三陣の元親を討つためだったのだ。

信親と彦十郎は、山崎からさらに下流まで敵勢が延びていると考  
えていた。が、違う。元親の軍勢が逆行して敵をせき止めているなら、  
隘路の向こうには敵の大軍勢が、元親を討つべく滞留しているはず  
だった。

このままでは、土佐勢三千が二万近い大軍の中で全滅しかねない。  
元親と信親を同時に失った長宗我部家は、秀吉の命に背いた敗戦の  
責めを負わされ、滅びるであろう。

左手の戸次川を見やった。古来、川での大戦は少なくないが、信親  
の場合は必然に思えた。

——どうやら龍の棲まう戸次川が、俺の死に場所らしい。

傍らの友を見た。彦十郎は神官出の武将のくせに、悟りでも開いた  
高僧のような顔つきをしていた。信親がたった今下した決断も、それ  
を翻意させられぬことも、もう打つ手が他に残っていないことも、す  
べてお見通しだろう。



「お主の言うことを聞いておれば、皆で逃げられたのにな」

「確か初陣の時も、似たようなことを言っておわした」

「まったくだ。だが、不思議に悔いてはおらぬのだ」

「困ったお人なれど、私も同じでござる」

彦十郎が呆れ顔で小さく笑った。

「すまぬな、彦十郎。俺の三顧さんこの礼を無視して神官のままでしたら、お主は死なずに済んだ」

苦笑交じりの低音が戻ってきた。

「自分で選んだ道でござる。あのままくすぶっておるより、若のおかげで、なかなか楽しい人生を送れ申した」

「若！」銅鑼声が近づいてくる。

信親隊の一領具足たちが、慌てて隼人に道を開けた。

「先をお急ぎくださいませい！ わしが退路を切り開きまする！」

やってきた頼もしき髭面の友に向かい、「まあ、落ち着け」となだめると、信親はすぐ脇に立つ航八に向かって微笑んだ。

「すまぬが、お前は急ぎ父上のもとへ行き、俺が隼人や皆と共に、山へ逃れ、すでに撤退したとお伝えせよ」

驚き顔で、航八が見ていた。

「お前ならできる。お前にしかできぬことだ、航八」

命を捨てて、これから大挙押し寄せてくる敵の奔流を食い止め、時を稼げば、元親とすでに第三陣に合流した将兵たちを土佐へ帰せる。

## 友よ 第12回

航八の父もその兄弟も、航八の兄も皆、長宗我部の戦で死んでいた。これ以上、死なせるわけにはいかぬ。

「急げ。多くの命がお前に懸かっている。必ずたどり着けよ。せせらぎを頼むぞ」

強く促し、「はっ」と畏まった航八が去ると、傍らで懔然とした顔の隼人に「頼みがある」と、気安く語りかけた。

「ここで、俺と一緒に死んでくれぬか」

絶句する師の逞しい肩に、音を立てて手を置いた。

「何を言われるか！ わしは御館様より、若をお救いするため

」

「そういえば、初陣でもお主に世話を掛けたな。かつて、あの新目弾正がやった戦を、俺もここでやりたい」

信親はひらりと馬から降りて、「喉が渴いた」と小川の水を飲んだ。

脇津留川だ。

「若、何をしておられる！ こうしておる間にも、敵はどんどん下流へ――」

「美味しい水だぞ。皆も飲め」

信親の声かけに、皆が水を飲み始めた。小川に頭ごと突っ込んでいる者もいる。

「彦十郎！ お前が従っておりながら、何たるざまじゃ！」

隼人が怒鳴りつけると、舌鋒を躲すように彦十郎も馬から降りた。

## 友よ 第12回

「今となつては、土佐勢を全滅させるか、それとも半分を生かして帰すか、二つに一つ。若がどちらを選ばれるかは、決まっております。若がお一人で逃げられぬのは、われらが誰も逃げ出さぬのと同じ。若が敵に降って人質になるはずもなし、私には説得が無理でござる。何なら、福留殿が試してみなされ」

信親は立ち上がると、川辺の猫柳の枝に手をやった。

「見よ、冬芽が付き始めた。蕾が綿のように膨らんで、やがて冬も終わるだろう」

「猫柳が何じゃ！ 若殿だけなら、まだ逃げられますぞ！ 命を拾いなされ！」

銅鑼声を張り上げる馬上の巨漢に向かい、信親は微笑みながらかぶりを振った。

「俺抜きで二桁多い敵と戦えるのか？ このままでは長宗我部勢は撤退もできず、敵中に全滅する。だが、俺たちがここで島津の大軍をしばしせき止めれば、半数以上を生きて土佐へ帰せる」

航八が辿り着き次第、第三陣は速やかに撤退を開始するはずだ。

「世には、細く長い川も、短く太い川もある。いかに小さな川でも、澄んだ水を流していれば、俺は好きだ」

長宗我部信親の人生は、短くして途絶えた小川に過ぎまいが、淀みなく澄んでいたと、胸を張って言える。

「合戦無用という秀吉公の命に背いた戦で、これほど大負けした以

## 友よ 第12回

上、四国勢はただでは済まぬ」

この戸次川の戦は仙石が一人で引き起こした大敗北だが、厳命に反した以上、敗将たちが責めを負わされるのは戦国の習いだ。仙石、長宗我部、十河、大友、どの家が改易かいえきされても不思議はなかった。誇り高き元親なら、腹を切るだろうか。あるいは一領具足と共に蜂起して、土佐一国を焦土としつつ滅びるやも知れぬ。

「だが、俺がこの地で、秀吉公より賜りし真紅の陣羽織を着て、最後まで戦って死ねば、話は変わるはずだ。長宗我部を生かし、土佐の皆を守るだろう」

このままなら、長宗我部は二つの大黒柱を失い、取り潰されよう。これを避けうる手立ては、ひとつしか、なかった。たとえ無様で惨憺たる負け戦であっても、御曹司が最後に敵にひと泡吹かせて死んだとすれば、話は別だ。秀吉の心を動かせると、信親は見た。

「……人身御供になると、仰せか？」

震え声で問う隼人に、信親は頷き返した。

かつて新目弾正が命を捨てて守ろうとしたように、故郷はどこからやってきたよそ者によって、治められるべきではない。故郷の土と川と空によって慈しまれ、育まれた者が、感謝の念と深い愛着を胸に抱きながら、治めるべきだ。

「そうだ。無惨に死せるわが屍しかばねのみが、長宗我部と土佐を救うのだ」  
秀吉なら、信親の死の意を解し、供儀に敬意を表して、長宗我部を

## 友よ 第12回

残すはずだ。

信親は初陣で学んだ。たったひとつの命はこういう時にこそ、使うべきものだ。

「さすがはわしらの若殿、天下一の御曹司じゃわい」

隼人が晴天を仰ぎ、馬鹿笑いした。

幸運にも、信親は良き両親のもとに生まれた。素晴らしき師や友たちと出会えた。あと少しばかり生きてみたかったが、人間は一番幸せな時に死ぬのが良いのやも知れぬ。されば、人生に悔いはない。名を青史にとどめうるなら、それも一興だ。

最後は、戸次川で一頭の巨龍のごとく戦う。

確たる自信は、あった――。

今の信親なら、友たちと力を合わせ、あの時の新目弾正のような戦いができるはずだ。



六

信親と彦十郎が再び馬に跨ると、残っている諸将が集まってきた。

「ついに、四万十川には行けなんだな」

土佐の名高き大河ながら、結局、一度も訪れえなかった憧れの川だ。

「代わりに、三途さんずの川がもうすぐ見られ申そう」

彦十郎の毒舌に皆が笑っていると、どこぞから桑名が弓を手にやってきた。すべて、察しているらしい。

## 友よ 第12回

「若殿なら心配はないと思いますが、念のため、死に方の作法を改めて伝授致しましょう」

「無用だ、桑名。最後まで死力を尽くして戦うなら、いかなる礼も欠きはすまい」

「娘のために婿殿を救いたいと無理をしたが、どうやら間に合わなんだようじゃな」

馬が嘶き、数名の手勢と共に現れたのは石谷頼辰だった。漣みおが受け継いだ分厚い唇に、微笑みが浮かんでいる。

「義父殿おやじ、お詫びの言葉しかござらぬ」

実父と夫を同時に失う漣ふびんが不憫でならなかった。だが、長宗我部の家が残り、小滝と共に生きてくれることを願うしかない。

「幕臣が異郷の地で果てる数奇な運命も面白い。婿殿のおかげで死に場所を得て、人生の最後を飾れるというもの。御礼を申し上げます」

石谷は、主家を滅ぼした秀吉のために死ぬのでは決してあるまい。長宗我部に羽柴でなく、柴田を選ばせた責めも感じていただろう。

死ぬ時は皆同じでも、これまで皆、それぞれが違う道を歩んできた。死すべき理由は、一人ひとり違っていい。

頼辰に向かって微笑み返した時、信親の隣で轟音がした。彦十郎の鉄砲だ。

下流側から戻ってきた薩摩兵が一人、遠くで斃たおれた。元親の第三陣が撤退を開始したために引き返し、いよいよ戦場に残る敵の掃討に

## 友よ 第12回

入るのだろう。足軽が姿を見せ始めた。

「死ぬのは怖いが、死んでしまえばこっちのもの。三途とはどんな川か、楽しみでなりませんな」

口々に言い合う二蔵の首根っこを隼人が馬上から掴んだ。

「何じゃ、お前らも残っておったのか」

「わしらは宴会が得意でも、戦場では影が薄いですからなあ」

ブン、ブンと金砕棒を振り回す武者がいる。

「畜生め、まさか今日死ぬとは思っとらなんだ。拙者が側室をたくさん持つ夢は来世でござるな。その頃には乱世も終わっとるじゃろう」  
信親の友とさえならねば、資吉がここで死ぬことはなかったはずだ。

「輪廻りんねが早すぎたら、まだ続いておるやも知れぬぞ」

資吉に彦十郎が毒舌で返すと、また皆が笑った。

何でもいい。今は皆、笑いたいのだ。

「新目弾正は籠城して、実に天晴れな戦をやった。だがここに城はない。俺たちは砦のない平地で、あの戦いをせねばならぬ。されば俺たちの最後の戦いに、軍師から良き策はあるか」

「生き延びる策はまだひとつ、ござるぞ。皆、空をろうご覧じろ」

彦十郎に促されて皆が空を見上げた。

冬の大空は、突き抜けるように果てしない青、だった。

「落日まで戦いを続けられれば、敵味方の区別もつかぬようになる。

## 友よ 第12回

暗がりに紛れて山へ逃れ、各自落ち延びられよ」

皆が笑い出した。戦が始まって一刻ほど経つが、日没まではまだ一刻余りある。

二万ほどの敵を相手に、七百の兵がどれだけ戦い続けられるか。

「なるほど。まだまだ望みはありそうじゃな」

「半分くらいは土佐へ戻れそうだ」

吉良と本山たちも威勢がいい。

隼人が豪快に笑うと、信親も笑顔で彦十郎に告げた。

「赤沢宗伝あかさわそうでんより学びし、あの陣がよかるうな」

こくりと頷くと、彦十郎が高らかに叫んだ。

「全軍！ 若殿を中心に、円陣を組め！」

約七百の土佐将兵は、信親を中心に整然と幾重もの円を作った。友が力を合わせて作る人の砦だ。戦場で鍛え抜かれた精兵の動きはきびきびとして、川の瀬を行く清水を思わせる。短い人生だったが、信親はよき友をたくさん得た。

「わが円陣で、危うい所には俺が助けに参るゆえ、安心せよ」

剣戟の音に目をやると、上流の街道を後退してくる小隊があった。へ抱き杏葉せいきの旌旗は、大友家だ。戸次統常がわずか十数人と共に、撤退しながらまだ戦い続けていた。

「見よ。大友家の勇将も、友と一緒に戦っている」

冬の陽だまりに温もる中津留河原に、四方からいよいよ鬨の音が



## 友よ 第12回

近づいてくる。

東の山中から、喧かまびすしい鎧の音が響く。別働隊の本庄勢が次々と現れた。

西の戸次川から、伊集院勢と家久の本軍が続々と姿を見せた。下流への追撃をやめたのだ。

南の上流側から、ひととき大きな鬨の声が上がった。鬼武蔵率いる新納勢の再襲来だ。

北の下流側から、雲霞の如き軍勢が引き返してきた。狙い通りだ。これで、元親たち土佐勢の半分余りは逃げられよう。

夕暮れのまだ来ぬ中津留河原が、敵の大軍勢によって埋め尽くされようとしている。

「さてと、始めるか」

天高く、若者は赤柄の大薙刀を突き出した。

「友よ！ 戦いは、これからだ！」

長宗我部信親が「勝鬨かちどき」を上げると、友たちが一斉に鬨の声を上げた――。



七

戸次川の戦いから約半年の後、夏の土佐は川で水浴びでもしたい暑さだった。

航八はまだ痛む足をわずかに引きずりながら、ようやく岡豊城下おこう

## 友よ 第12回

まで帰ってきた。

ちょうど市が立っており、魚座の前では、太った中年の女が桶の中  
でくねくねする鰻を指差して値切っている。出来たての羊羹ようかんを買う  
老若男女の行列もある。宍喰屋が最近仕入れ始めたという甘い南蛮  
菓子まで出店で売られていた。

市の外れでは、老人たちが腰をさすりながら何やら世間話をして  
いる。その脇では、竹細工の玩具の取り合いなのか、幼い童が掴みか  
からんばかりの剣幕で口喧嘩していた。

川べりへ出ると、童たちが裸で川に潜り、蟹を捕まえていた。川の  
遊びは幾らでもある。

長宗我部の治世にあって、土佐はどこもかしこも賑やかだ。

——若様たちは、こいつを守りたかったんだ……。

航八は足を止め、岡豊山を見上げた。

一番手前に、信親の住んでいた出丸がある。以前は信親を慕う若者  
たちが頻繁に出入りしていたが、今はひっそりとして見えた。

あの日、信親から最後の命を受けた後、航八は街道を避けて森へ入  
った。何とか敵中をすり抜け、第三陣の元親のもとへたどり着き、伝  
言を告げた。

長宗我部勢はただちに撤退を開始したが、辺りはすでに敵だらけ  
だった。あと少し遅ければ全滅していたろうが、多くの土佐将兵が乱  
戦の中をかるうじて生き延びた。航八は逃げる途中で足を撃たれて

負傷したが、どこからともなく現れた師の、いに助けられた。ようやく満足に歩けるようになり、土佐へ帰ってきたのである。

先月、島津は秀吉に降り、信親が言った通りに九州の役は終わった。戸次川の戦場から真っ先に逃げ出した仙石秀久は、踏みとどまった四国勢の奮戦に助けられ、ほうほうの体で戦場から脱出したが、豊前の小倉城まで四十里近くも北へ敗走した上、何と自領の淡路洲本までさっさと逃げ帰った。

皆がその醜態を聞き、誰が歌い始めたのか、

〴〵仙石は 四国をさして逃げにけり 三国一の臆病の者

と、天下の嗤いものになった。

激怒した秀吉は仙石を改易した。仙石は今、高野山に蟄居しているらしい。十河家は存保の子が幼かったせいもあり、秀吉によって取り潰された。

他方、元親は生き残った手勢をまとめ、船で伊予の日振島まで撤退し、すぐに上方へ使者を遣わして秀吉の指図を仰いだ。いったん帰国を許され、秀吉の本隊が上陸すると再び豊後に渡り、羽柴秀長の軍に合流して日向で戦った。

元親と対面した秀吉は、信親の死にざまを聞き、共に涙したという。秀吉の命に反しながら、長宗我部が戸次川での敗北の責めを全く問われなかったのは、また、元親は峻拒したものの秀吉が長宗我部に大隅国まで与えようとしたのは、いずれも、信親の清冽なる死に報い

## 友よ 第12回

るためだったろう。

城下を抜けて石清川いわしがわ沿いに歩いてゆくと、小川の水で胡瓜きゅうりを洗う小娘の姿が見えた。

「猿猴にでも食わせてやるのか、せせらぎ？」

「航八さん！ 生きていたのね」

少女が胡瓜を放り出して、すがりついてきた。優しく抱き締める。

「生かされたんだ、若様に」

「若さまは亡くなられた、と……」

一領具足たちの死に対し責めを感じていた信親は、岡豊でせせらぎと航八に出会えば、必ず声を掛け、しばらく会わなければ、ふらりと訪ねてきた。だがもう二度と、あの長身は現れない。

「ああ。逝ってしまわれた。でも、あの方のお好きな川の流れのように、何の未練もおありではなかったろう」

航八たちに清らかな思い出だけを残して、若者はごく短い人生の流れを爽やかに終えた。

森の中で最後に中津留河原を振り返った時、信親の笑顔からは白い歯がこぼれていた。親しき友たちに囲まれて、まるでこれから祭りでも始めそうなほどに楽しげな様子だった。

「若さまとは、またどこかの川でお会いできそうな気がしてなりません」

「きっと、お会いできるだろう」

## 友よ 第12回

驚くせせらぎに向かって、航八は微笑む。

師のるいは、戸次川をずっと遡った豊後の山奥のキリシタンたちの村で、元気な男の子を産んだ。無事な出産を見届けてから、航八は豊後を後にしたのだった。

「若様によく似ておられる。生まれ変わられたのではないかと思うくらいだ」

せせらぎが顔を輝かせている。信親なら、川の何かにも譬えたとうな笑みだった。

「お会いしたい。今はどこに？」

「健やかに育っておられよう。きっと、どこかの川の辺でな」

今度こそ戦とは全く無縁な人生にすると、初めて母になったるいは言っていた。強くて賢いあの女性なら、きっとできるだろう。

るいは明かさなかったが、母子が幸せに暮らすのは、きっとあの川の辺で、その住まいの近くには猫が、もしかしたら猿猴までいるだろうと、航八は思っている。

(了)